





布袋弾琴図 遠山記念館蔵

練された絵画として尊重され、その書とともに没後も高く評価されていきます。近代に行なわれた名家の売立目録を見渡しても、五百点以上の作品が確認できます。これは幕府の御用絵師となり狩野派中興の祖である狩野探幽に引けを劣らない作品数です。もちろん、全てが真筆とは言えませんが、昭乗作品がいかに愛好されてきたかがわかります。当然、後の画家に与えた影響も大きく、昭乗作品を後の画家が写した作例も散見されます。

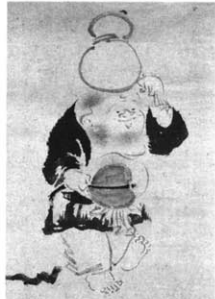
大きな影響を受けた画人の一人に、尾形光琳があげられます。光琳は俵屋宗達に私淑し、江戸時代中期に琳派を大成させた画家として知られますが、法橋就任以前はかなり熱心に松花堂作品を学習していたことが近年明らかになってきました。光琳の昭乗学習を示す代表的な作品に「蹴鞠布袋図」があります。この作品の布袋の足をあげる姿勢や衣を塗り残す技法、軽妙な筆致、諧謔的な表現は、昭乗の「踊布袋図」などと非常に近い

特色を示しています。もちろん、より明解な形態把握や潑刺とした画趣など相違点も見られますが、昭乗の作風を継承し展開させた画家に尾形光琳をあげることは不当ではないでしょう。

ここで注目すべきは、昭乗が「踊布袋図」を描く際、おそらく東山御物に納められた道釈人物画を意識していたでしょうが、尾形光琳の「蹴鞠布袋図」からはもはや牧溪、梁楷という画家達の姿はほとんど見えないことです。とすれば、光琳芸術の形成だけでなく、日本的な美意識および近世的な美意識の展開を問題にする場合、昭乗作品は重要な役割を果たしたと言えます。また、文人画家たちにとっても僧侶でありながら、風雅を好み書画に秀でた人物という昭乗像自体、魅力ある存在であったに違いありません。昭乗作品の江戸時代中期以降の画人に及ぼした影響の大きさを考えれば、画人としても今後ますます再評価されるべき人物と言えるでしょう。

(中部義隆)

踊布袋図(部分) 松花堂昭乗筆



蹴鞠布袋図(部分) 尾形光琳筆

